
独りぼっちの魔女。

甘夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独りぼっちな魔女。

【Nコード】

N2786W

【作者名】

甘夏

【あらすじ】

昔、ある王子がいた。王子の傍には魔女がいた。その魔女は王子のために幽閉されてしまった。それから、百年。不老不死の魔女はまだこの城の何処かに幽閉されているらしい……。独りぼっちな魔女、その魔女を見つけた王たちの物語。

1、昔々の話です。

昔、昔のことです。

百年も前になります。

ある国に王子がいました。

この王子は第二王子で王と平民の娘である妾の間に生まれた子でした。

王は第二王子を可愛がり、妾を王妃よりも愛していました。

それを知った王妃と第一王子は第二王子を憎み、殺そうとしました。しかし、それに気付いた妾が第二王子を庇い死んでしまったのです。

王は嘆き悲しみ、ついには病にかかってしまいました。

第二王子を守ってくれる人は誰もいなくなってしまったのです。

そこに現れたのが城の近くにある森に住む魔女でした。

魔女は不老不死で傍には使い魔である二匹の狼しかいません。百年もの間、森の中で独りぼっちで暮らしてきた寂しい魔女でした。しかし、魔女はある日ふらっと森に迷い込んだ少女と友達になったのです。

その少女は第二王子の母親でした。

少女が死んでしまったことを知り、そして、その大事な友達の息子が危ない状況であることを知って魔女は現れたのです。

魔女は第二王子に言いました。

「私があなたを守ります。あなたの母親の代わりに私があなたを守ります。」

その日から第二王子の傍にはずっと魔女と使い魔の黒い狼と白い狼がいました。そして、王妃や第一王子から第二王子を守り続けていたのです。第二王子は魔女に懐き、父である王の病気は治ると信じて暮らしていました。

しかし、王が病のせいで死んでしまったのです。

新しく王になってしまったのは第一王子。王となった第一王子は、邪魔な第二王子を城のどこかに幽閉しようと思いました。暴君となつてしまった第一王子に反論できる人はいなく、みな、第二王子を哀れみのこもった目で見ていました。それでも1人、第一王子に反論した人がいました・・・魔女です。しかし、第一王子は魔女の言ったことに聞く耳を持ちませんでした。

何を言っても無駄だ、と気付いた魔女は言つたのです。

「私が代わりに幽閉されます。」と。

それを聞いた第一王子は

第二王子を殺せなかったのはこの魔女のせい。この魔女さえいなくなれば、第二王子を殺すことは簡単だ。と考え、魔女の申し出を了承しました。

そして、魔女は

「あなたは賢く優しい人です。きっと王になればこの国をもっと豊

かに出来るでしょう。…しかし、無理はなさらないください。私の望みはあなたが幸せであること、それだけなのですから。」
と、第二王子に言い残し、どこかへとなくなってしまうました。
二匹の狼も悲しそうに空に向かって吠え、魔女とともにいなくなってしまうました。

第二王子は、酷く悲しみ泣いてばかりいました。しかし、気付いたのです。魔女が言った最後の言葉は第二王子が王になること前提だったことに。

第二王子は第一王子からの圧力や刺客をうまくかわしつつ、王になるためにたくさん努力をしました。その第二王子のひたむきな姿に多くの臣下が感動し、気付けば第二王子の周りには人が溢れていました。

その中のある賢い臣下が、「今の王を失脚させ、新しく第二王子を王にしよう。」と提案し、みな、それに賛成しました。

そして第二王子は少年から青年になった頃、第一王子は玉座から引きずり下ろされ、その玉座には第二王子が座りました。

第二王子——王は魔女を探すことに尽力しましたが、魔女を見つけ出すことはついに出来ませんでした。

それでも王は魔女に自分が王になったことを伝えたかったのです。王は誰に言うでもなくまるで叫ぶように言っていました。

「私はあなたの言うとおり王となった！それは他でもない、魔女よ！あなたのおかげだ！あなたのおかげで手に入れることが出来たこの玉座をあなたに贈りたい！……どうか、どうか受け取ってくれ……私だけの、魔女。」

それを聞いていた臣下たちは、驚きどよめきました。玉座を捧げるなんてそんなこと今まで無かったからです。しかし誰も抗議の声をあげることはありませんでした。言っただけにうなだれた王が酷く悲しそうだったからです。

静まり返った広間に声が響きました。まぎれもない魔女の声です。

「あなたが王となつたのはあなた自身の力です。私は何もしておりません。…それでも、私に玉座を贈りたいと言つのですか。」

懐かしい魔女の声に瞳を濡らしながら、王は静かに頷きます。

「……ありがとうございます。……あなたが王になつたお祝いに代わりの玉座を差し上げます。……どうか無理をなさらずに。」

それを最後に、魔女の声は聞こえなくなっていました。

気付けば前の玉座はなくなり、より立派な玉座がそこにはありました。

王はその玉座を死ぬまで大切にすると聞きます。

これである国の王子の話は終わりです。

……しかし、魔女はどこにいたのでしょう？

噂では城の地下に魔女の部屋があり、今でも魔女はそこに暮らしているそうです。

1、昔々の話です。（後書き）

2、寂しい少女の話です。

ここは城の何処かにある、とある部屋。

光の届かない地下にあるこの部屋は、真っ黒な闇に包まれている。

この部屋には何も置かれていなかった。・・・ただ1つを除いては部屋中央。

そこには何もないこの部屋には不釣り合いな立派な椅子が置かれていた。

長年、放置されていたその椅子には埃が積もっていた。それでも高級だとわかる真っ赤な布にそれを縁取る黄金、まばらに散らばる宝石。何よりも座り心地のよさそうそれは玉座と呼ばれるものであった。

そして、その玉座に座る1人の少女。見た目16、7歳のその少女の肌は白く、その髪もまた真っ白だった。身動きせずに、目を閉じている少女はまるで美しい人形のようなだった。

ふと、少女の瞳が震える。そして、ゆっくりと開けられたその虚ろ気な瞳の色は血のような赤、だった。しばらく瞬きを繰り返していた少女は溜息をつき、肘掛けをゆっくりと撫でる。

「夢を、見た。」

ポツリと呟かれた言葉は、暗い闇に吸い込まれる。

「酷く懐かしい夢だ。」

少女は誰かに話しかけるように話していたが、ふと周りを見渡してあることに気が付き、悲しそうに笑う。

「・・・そういえば、出てこれなくなっちゃったんだっとな。
私の可愛い狼たちは。」

——…思い出すのは、青年となった第二王子と会話をしたあの時。
今のように寝ていたら、叫ぶような悲しい悲しい声が聞こえた。それが第二王子の声だと気が付くのに時間はかからなかった。

私のような魔女に感謝し、玉座をくれると言ってくれた。大事な大事な玉座を。

凄く嬉しかった。ずっと独りだった私は贈り物なんてされたことはなかったから。

でも、貰うだけじゃダメだと思った。だから、もっと立派な玉座を贈り返そうと思った。

・・・その為には、魔力を使う必要があった。

ここに入れられる際、脱走だとか出来ないようにって魔力を奪われた。それでも、狼たちの為の魔力は何とかして隠しきった。狼たちが“こっち”にいられるようにする魔力は。

でも、私は使ってしまった。その魔力を。だから、狼たちは私の傍にすることが出来なくなり、元いた場所——魔界にかえってしまった。・・・それでも消える瞬間、「また。」って言う声がしたからここから出られたらまた会いに来てくれるんだと思う。・・・ここから出られれば私の魔力は戻る。……—

「・・・独り。」

そして、また眠りにつく少女。

少女は不老不死。何も食べなくても生きられるし、年も取らない。
だから、ずっとこの部屋で独りぼっちでいる寂しい少女。

この寂しい部屋から少女が出ることが出来る時まであともう少し・
・。

3、とある異世界少女のお話です。

あたしは異世界トリップっていうものを体験した。
したって言うよりもしているっていう現在進行形。

異世界に来ちゃったのは事故だっていうのがまた面白いところだっ
て思わない？

ただ、なんとなく歩いてたら、なんかこう・・・うん。落ちちゃっ
たのよ。

着地した場所はどこかのテーブルの上。目の前にはテライケメンな
男がいた。残念なことに無表情なんだけどね。

ていうか！

普通はここで！

「お待ちしておりました。勇者様or巫女様。」
か、

「異世界から来たのかい！？行くとこがないだろう。ここにいれば
いい。」

ってなるパターンだと思うのよ！

なのに、目の前の男は

「誰だ？お前は。」

って！

しかも、右側とか左側とか右斜め後ろとか左斜め後ろとかから剣を
突きつけられてるし！男は無表情でそれ見てるし！てか、この無表
情男は偉い奴なの！？

めっちゃ焦ったわよ！このままだと、牢屋にぶち込まれるパターン

だつて思ったからね！

実際、無表情男は「・・・こいつを牢に放り込め。」って言おうとしたし！もちろん、言われる前にあたしは行動を起こしたわ。

「こいつを牢に「助けてくださいませんかっ!？」・・・。。。」

言つてやった。半ばキレながら言つてやった。つてあたしは満足してただけだね。

無表情男が若干イラッとした雰囲気を出して、あたしに剣を突きつけてた鎧ヤロー達が一瞬固まつて「ああ・・・、コイツ終わったわ。」「つていう雰囲気醸し出したから、事態を悪化させただけなんだつて気付いた。

「あたし、異世界から来ました。行くところがない上に、この世界の常識も知りません。だから助けてほしいんです。」

つて必殺うるうる上目遣いビームをかましながら、言った。あたしはよく「かわいいね。」「美人だね。」「つて言われてきた。実際にあたしは美少女だと思う。だから、上目遣いとかを上手く使えば男をあっさりと落とせる。そうやってあたしは下僕を作ってきたんだから！

だから、今回も上手く行くと思つてた。

落とすことは出来なくても、同情だとかはしてくれと思つてたのに・・・この無表情男はっ！

「・・・それが、どうした？お前を保護して俺になんの得がある？」
「なっ!！」

なんなんだ！コイツは!？

無表情な上に優しさの欠片もない最低なヤツだ！！

「ちよつと！それが儂げな美少女に言うべき言葉！？女、助けんの損得考えんじゃないわよっ！！」

思わず立ち上がった、無表情男を見下ろして言う。そして、気付く。テーブルの上にはティーカップやクッキー——あたしのせいで粉々になってしまってる——などのお菓子が置いてあった。・・・お茶会の途中だったみたい。まあ、あたしには関係のないことだけど。

「・・・儂げ？お前がか？」

無表情男はあたしに視線を向けずに言い、目の前に置いてあった紅茶に手を伸ばし優雅に飲む。

自分の顔が引きつるのが分かる。・・・立ち上がったついでにコイツの紅茶、踏みつぶせば良かった。

「うるさいわねっ！儂げじゃなくても女は助けるもんでしょ！？しかも、あたしは美少女よ！」

まだ喚き散らすあたしに、本格的に苛ついた顔をした無表情男。雰囲気やバイものへと変わっていったけど、あたしの喚く口は止まらず、無表情男に対して喚き散らす。

「・・・・・・・・黙れ。」

なんの感情も籠もってない声で言った無表情男はあたしに向けて軽く上げた掌をギュツと握った。とたん、何かに首を絞められてる感覚がし、声どころか息まで止まった。

「っあー!!」

「お前が女だろうが関係ない。」

無表情男が握った手にさらに力を入れれば増す首の絞まる力。自分の両手を首にやっても、自分の首に触れるだけ。

あたし、ここで死ぬのかな。

そう思った時、あたしの後ろから声がした。

「陛下。戯れはそこまでがよろしいかと。」

とても優しい声だった。

優しい声の人がそう言えば、しばらく感情のない目をあたしの後ろにいる人物に向けていた無表情男は溜息をついて、手を下ろす。

一気に空気が肺に流れ込んで、咳き込みながら膝から崩れ落ちる。

「ゴホッ、ゴホゴホ」

「大丈夫？」

温かい手で背中をさすってくれる優しい声をした人の顔をチラリと盗み見れば、美少年。年は無表情男とあまり変わらなさそうだけど、美少年って言葉が似合いそうな人がそこにいた。

「陛下。この子を助けてあげませんか？」

「・・・面倒だ。」

「暇つぶしになるかもしれませんが。」

「・・・・・・・・。」

また溜息をつきながら、「好きにしろ。」と言う無表情男。

「よかったね。君のこと、助けてくれるって。」

助けてくれることになったらしい。

「・・・え？一度殺されかけた人の世話になんの？
すっごく不安なんですけど。」

「・・・なんだその顔は。不満でもあるのか？」

「だって・・・、たった今殺されかけてたのよ？あなたに。・・・
いきなり首絞めたり、刺したりしないでしょうね？」

「・・・まだ、こりてないようだな。」

「あはははっ！おもしろい子だね！」

あとの展開は早かった。

豪華な部屋を用意されて、あたしが何故この世界にきてしまったのかだとかこの世界のことについて知った。

あたしはやっぱり誰か召喚されたとかじゃなくて、たまたまあたしが歩いてきた道にできた“空間の歪み”に、たまたまあたしが落ちて、たまたま無表情男の前に落ちたみたい。

勇者だとか訳分かんないことやられなくて安心はできたんだけど・・・困ったことに、帰る方法が分からない。

この世界には魔術がある。本来だったら、その魔術を使ってどうにかするんだけど・・・あたしの場合、意図的に呼び出されたんじゃないから元の世界の場所までの“道”が分からなくて帰すことができない。ていうか、それ以前にこの世界には異世界からの召喚魔術っていうものがないらしい。いや、昔はあったんだけど随分と前に禁止されて、今じゃその方法を知る者はいないらしい。いても、お

おまかなことしか知らない人で魔術を発動させることはできないんだって。

・・・役立たずが。

って、思っのは当たり前だと思わない？

でも、別に元の世界に対して思い入れのなかったあたしはこの世界で生きていくことに決めた。無表情男そう決めたことを言えば、「好きにしろ。」って言われた。だから、あたしはこっちに来てからの二ヶ月。無表情男たちの元で暮らさせてもらっている。この世界の暮らしに慣れてきたし、この世界の人たちとも結構仲良くもなれたと思う。

ああ・・・。そうそう。

無表情男ってこの国の王様なんですって。びつくりよねえ？
世の中、何があるのか分からないもんだわ。

4、きっかけのお話です。

「ええー・・・、何か怖いんだけどこの終わり方。」

ポツリと呟いたのは異世界から来た少女、小林妃奈。その手には、とある魔女について書いてある本があった。

不満げな妃奈の声に、静かに紅茶を飲んでいた2人の男が視線を彼女に移す。

黒髪に金色の瞳をしている無表情な男はギルバード。

金髪に淡い水色の瞳をしている柔らかな微笑みを浮かべている男はサンツエル。

人前では堅苦しい言葉遣いをしているが、実はこの2人幼馴染みのようなもので人がいなくなれば、お互い砕けた話し方になる。現在、いるのは妃奈に与えられた部屋。この3人以外に人はいない。

「何が怖いのか？」

「この本の終わり方よ。」

そう言っただけで妃奈は本を2人に向かって突き出した。

「何これ？題名書いてないけど・・・。」

「図書室で見つけたの。なんか面白そうだから、借りてきたんだけど・・・。」

「どんな話？」

「とある国の王子を助けた魔女の話。その終わり方がね、・・・しかし、魔女はどこにいたのでしょうか？噂では城の地下に魔女の部屋があり、今でも魔女はそこに暮らしているそうです。」なの。」

「・・・え。この国の話なの？これ。」

「そうみたい。ねえ、ギル。なんか知らない？」

妃奈がギルバードに本を渡せばめんどくさそうに本に視線を落とした。

「魔女のことは知らないが・・・、百年ほど前の国王と同じだな。」

「この王子様は実在するってこと？・・・じゃあ、魔女の話はでたらめなのかな？」

「そうなんじゃないか。」

「ええー。」

あからさまに落胆する妃奈をサンツエルが「まあまあ。」となだめる。ギルバードはしばらく本を読んでいたが、興味を無くしたのかまた紅茶を飲むことを再会した。

「その話はでたらめではないよ。お嬢さん。」

「うっわあー！」

いきなり背後から声をかけられ、肩をビクツと揺らす妃奈。

「おっ、おじさん！！いきなり現れないでくださいよ！」

「いや、君らがおもしろい話をしていたものだから・・・。」

「・・・こんなところで何をしているんですか。」

「散歩だよ・・・ところで。君たちはこの本をどこで手に入れたのかな？」

「普通に図書室に置いてありましたが・・・。」

「ふむ。そうか・・・私も昔、この本を読んだ時がある。」

そう言って、本の表紙を優しく撫で懐かしそうに微笑むこの男は、ゼノラード。ここ、オルギガス王国の前国王であった。彼の最愛の王妃、メアリーが亡くなったのを機に息子であるギルバードに王位

を譲った。現在は、どこか田舎にひっそりと暮らしているそうだが、たまにふらっとギルバードたちの前に現れる。

「そして、お嬢さん。君のように魔女探しをしたんだ。」

「会えたんですか？」

「ああ。会えた。彼女は確かに存在する。」

「本当ですか！？どうやって会ったんですか？どこに魔女はいるんですか？」

「うむ。・・・それが、覚えていないのだよ。」

「え・・・。」

「気付けば目の前に扉があった。ただ、彼女に会ったのは夢じゃないということだけは分かる。」

「そうですか・・・。」

「どうだね？君らも探してみては？」

「・・・そんな暇はない。」

今まで黙っていたギルバードが面倒くさそうに口を開いた。

「そうかい？なのに、のんびりとお茶を飲む暇があると。」

「俺に休憩をするなと？」

「そう言うわけじゃない。ただ、もっと別の休憩の仕方もあると言いたいんだ。」

「はっ。くだらない。」

「あ・・・あはははは。」

一気に空気が悪くなったその場を取りなすようにサンツェルがぎこちなく笑った。

別に、この親子の仲は悪いわけではない。何故か顔を合わせれば必ず言い合いになる。

「ああーっ！！！」

「うわあっ！・・・な、なに？どうしたの？」

いきなり叫んだ妃奈にサンツエルが聞けば、妃奈はにんまりと笑って答えた。

「あたしっ！帰れるかもしれないっ！！」

心底嬉しそうに笑っている妃奈だが、他の3人は訝しげにそんな彼女を見ていた。

それに気付いた妃奈は、何故か得意気に説明し始めた。

「だってさ、その魔女さんって本によると200年くらいは生きてるんでしょ？そしたら、随分前に禁止されたって言う召喚術、知ってるかもしれないじゃない！！」

「ああ・・・なるほど。」

「ギルもサンツエルもあたしが元の世界に帰れるように頑張るって言ったじゃない？だったら、魔女探すの手伝ってよ。」

「ははは！ギルバード。魔女を探す理由ができたみたいだぞ？」

「・・・・・・チッ。」

かくして、妃奈、ギルバード、サンツエルの3人の魔女探しが始まったのである。

4、きっかけのお話です。(後書き)

ギルバードの国の名前はオルギガス王国っていうらしいです。そうになると、ギルバード・オルギガスって感じになるのか？よく、分かんいです(´・ω・｀)

5、出会いのお話です。

3人は城内でも、気味が悪いと評判である北側の城の奥にいた。今では、あまり使われていないこの周りには森が茂っていて、日の光があまり入らず、いつも薄暗い。

「おじさんはここ辺りで扉を見つけたって言ってたけど・・・。」
「それっぽいのないね。」
「・・・・・・。」

薄暗い廊下に靴音を響かせながら、歩く。

「ここって、何で使われてないの？薄暗いけどちゃんと使える場所よね？」
「ああ…。うん。なんかね、出るらしいって。」
「何が？」
「幽霊的な？」
「幽霊!？」

妃奈は目を丸くして、驚いた。

「いや、幽霊“つばい”って感じなんだけど……。ねえ？ギル？」
「ああ。」
「つばいって何よ？」
「うん。黒い影が出たり、狼の遠吠えみたいのが聞こえたり・・・あと、謎の気配みたいな。」
「謎の気配って・・・？」
「精霊でもないし、人でもない。よく分からないんだよ。」

「・・・もしかしたら、それは魔女の気配なんじゃない？」

「魔女の？」

「そう。ほら、ちょっと失礼だと思うけど・・・魔女さんは不老不死らしいから人間じゃないかもしれないし。狼の遠吠えって言うのも、魔女さんの使い魔かもしれないじゃない？」

「なるほどねえ。・・・ありえそうだ。」

と、急にギルバートが立ち止まった。そして、なんの変哲もない壁をじつと無表情に見つめだした。

「どうしたの？」

「そこはただの壁だと思うけど・・・。」

「・・・いや。何か魔術がかかっている。」

「えっ！？魔女さん！？魔女さんの部屋に繋がってるの！？」

「さあな。」

言いながら、ギルバートは壁に向かって掌を向け、横に払う。

「「「「・・・」」」」

しばらく、何も起きなかった壁にスツと線が入る。

ちょうど扉のような形になったその線より内側が徐々に消えていった。ぽっかり空いたその空間には下に降りるための石造りの階段のみがあった。その先は、暗い闇に包まれている。

「・・・扉、ではないわね。」

「多分、無理やり魔術を解除したからじゃないかな。本来は気紛れにちゃんとした扉が現れるようになってるのかもしれない。」

「・・・降りるのか？」

「当たり前でしょ？さっさと行くわよ！」

実際、女であるなら怖がってもいいだろう暗闇に物怖じもせずにズンズンと階段を降りていく妃奈にサンツェルは苦笑を漏らし、ギルバートは呆れ顔をした。

2人は互いに顔を見合わせてから、妃奈の後を追いかけていった。

空気が揺れた気がした。

目をうつすらと開ければ、広がっているのはいつもと変わらない闇で。

やっぱり気のせいかと、また目を閉じる。

じめじめした空気に、埃っぽい匂い。そして、真っ暗闇の中に私は独りきり。

ああ…、いつまで私はここに居なければならぬのだろう。

私の狼たちは元気なのだろうか。私のことなんて忘れてしまったんだろうか。オルギガスは無事に繁栄し続けているのか。

気になることは山ほどある。それでも、私はここから出ることが出来ない。出ることが許されない。それが約束なのだから。

私の可愛い狼もいないこの部屋には暗く重い闇と、ただ空虚感があるだけだった。

それらから目を反らすため、私はまた眠りにつく。

「いつまで続くのかしら。この階段。」

あたしたちが降り始めて大分たった気がしたけど、まだまだ続いて
そうなのこの階段。いい加減にしてくれない？

真つ暗だった階段はサンツエルが出してくれた光の玉みたいなもので、不自由はない。ちなみに、この光の玉、勝手に前に出て先導してくれる。たまに、壁にぶつかる所がちょっと可愛いつて思う。別に光の玉に意志があるわけじゃないけど。

初めはサンツエルと話してたけど、今のあたしには会話する余裕がない。日頃の運動不足がこんな所で裏目に出た。

話さなくなったあたしに構わず、にこにこ笑っているサンツエル。・・・いつもいつも、笑顔。どんなときでも笑顔。辛くないのかしら？

ギルは相変わらず無口だし。ついでに無表情だし。なんの感情も読み取れない瞳で歩いている。ぶっちゃけるとたまに怖い。

「あ。」

サンツエルが声を上げた。

俯いていた顔を上げて前を見る。

すると、階段の終わりが薄暗い先に見えた。相変わらずその向こうは暗いけど。

広い空間に出た。

そしたら、光が届くギリギリの所に誰かの足が見えた。顔を見合わせ、警戒しながら少しずつ近づいていく。近付いていくと同時に明らかになっていく足の持ち主の容姿。

妙に豪華な、だけど薄汚れているイスの肘掛けにある白い手。真っ黒なローブには白い髪が垂れている。

微かに上下している胸に“彼女”が生きていることを示している。そして、少し幼い寝顔。

それは、まるで人形のような美しい少女だった。

あたしたち・・・ギルでさえも言葉を失い、その少女を凝視した。

この子が、魔女？

本には魔女の容姿は描写されていなかった。

でも、この状況だとこの子が魔女だと考えるのが妥当、かしら。

・・・起こして、本人に聞くのが一番早いわね。

その考えにギルも至ったんだろう。彼は、足を一步、少女に向かって出した。

でも、その動きはすぐに止まる。あたしは息を思わず止める。

少女の顔が微かに歪んだ。

その長い睫毛が震え、少しずつ瞳が開かれていく。

それを見ながら、息を止めていたことを思い出し、呼吸を再開する。

少女の瞳は赤かった。

不気味、とさえ思えるくらいに。

まだ目が覚めていないのか、目がとろんとしている。

伏し目がちになっていくその赤い瞳は、2、3度まばたきをして、緩やかに視線を上げていく。

そして、あたしたちがその瞳に映る。

まるで夢を見ているかのようにぼんやりとしていた少女は驚愕をその顔に浮かべた。

そして、本当に嬉しそうにふわりと笑い、彼女は言った。

「こんにちは。」

てつきり警戒されるかと思ったら、挨拶をされた。

少し拍子抜けだったけど、あんな可愛い笑顔を見せられたらこっちも嬉しくなる。

だから、あたしも笑みを浮かべて言う。

「こんにちは。」

これが、あたしたちと魔女さんの出会いだった。

5、出会いのお話です。(後書き)

ついに魔女と出会った!!

5話目でやっと!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2786w/>

独りぼっちの魔女。

2011年11月16日11時05分発行